



Title	カナダ外交政策論の研究-トルドー期を中心に-
Author(s)	櫻田, 大造
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43019
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	櫻 田 大 造
博士の専攻分野の名称	博 士 (国際公共政策)
学 位 記 番 号	第 1 5 0 6 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 1 2 年 2 月 2 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	カナダ外交政策論の研究—トルドー期を中心に
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 黒 澤 満 (副査) 教 授 米 原 謙 助教授 星 野 俊 也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ピエール・トルドー＝ジョー・クラーク時代のカナダ外交政策を国際関係理論とカナダ地域研究を統合した視座で解析した。具体的には1968年～1984年の16年間に、政治化し、カナダ閣僚の関心を惹起した37の国際的紛争事例を対象に、事例の「過程」及び「結果」に峻別して、パワー・イメージ・アプローチによって分析した。当該アプローチに従って、カナダのパワーを3段階に類型化すると、ミドルパワー・カナダは機能主義的外交スタイルを採用し、調停・調整役を果たし、啓発された国益を尊重する外交過程を生成するのに対して、スモールパワー・カナダは対米追従姿勢と州利益を反映した国益を追求する傾向を示す。カナダをプリンシパル・パワーとして捉えると、単独的外交イニシアティブを採用し、独自の利己的国益達成を目指す世界有数の主要国となる。「短期的紛争の勝利」の度合いとして定義した外交交渉結果も、スモールからミドルを経てプリンシパルへとパワーが上昇するに従って、「敗北」、「引き分け」、「勝利」へと成功度が上昇するものと予期される。本論文の事例研究の結果、「外交過程」においては、37事例中、17件においてミドルパワー的言動、16件においてプリンシパルパワー的言動、4件においてスモールパワー的言動に合致する反面、「結果」に焦点を絞ると、完全成功に該当するプリンシパルパワー的なものは、8件のみに留まり、ある程度の国益が遵守できたミドルパワー的「結果」は16件になった。特に、1968～1972年の第一次トルドー期において、カナダは「過程」・「結果」両面においてプリンシパルパワーに相応しい事例が顕著に見受けられ、二国間争点よりも多国間争点において、カナダの勝利の確率が向上した。また、米国政府にとって死活問題とも形容されうるハイポリティックス分野での二国間対立が生じた場合には、米加「支配・依存」構造に動揺が見られず、カナダは対米追従姿勢を見せた。その反面、首相自身の関心を引いた事例においては、紛争収束がカナダに有利な結果と成りやすかったことも事例研究から検出された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、トルドー期を中心にカナダ外交政策を理論と事例研究に基づき包括的に検討するものである。これまでのカナダ外交の研究は史的研究や個別問題に焦点を当てたものが多く、またすべての外交政策をひとつの理論ですべて説明しようとするものであった。すなわち、歴史的には、ミドル・パワー論から始まり、スモール・パワー論が主張され、さらにプリンシパル・パワー論が生まれてきた。

本論文は、上述のパワー・イメージ・アプローチを採用しながらも、これまでの先行研究を統合し、再構築し、三つのパワー・イメージを総合的に用いるアプローチを採用し、トルドー期の18年にわたる外交を理論的に分析しつつ現実の外交問題を詳細に検討し、カナダ外交の特質を総合的に検討するものである。

まず三つのパワー・イメージのそれぞれの内容が、分析の主要焦点、経済要因の重要性、国益観、国際レジームへの態度、外交スタイル、主要な外交実態・内容の類型、カナダ外交概要の特質、米国からの独立度、米加関係観、米加関係の中のカナダの対米政策の10の観点から分析される。

事例研究においては、37の事例が詳細に検討され、それぞれのケースにおいてカナダがいかなるパワー・イメージの下に外交政策を展開したかが検討される。それも、外交政策の実施過程と結果に分けて分析され、いかなる状況あるいはケースにおいてカナダ外交はうまく機能し、いかなる場合に失敗したかが説得力ある形で示される。

本書は、新たな分析枠組みとしての総合的パワー・アプローチを採択していることや、取り扱っている事例がきわめて多いことなど、これまでのカナダ外交政策研究を大きく超えるものであり、この分野におけるきわめて優秀な研究であり、国際公共政策の学位を授与するのに十分に値するものと考えられる。